

バビロンに
行きて
歌え

池澤夏樹

新潮社

バビロンに
行きて
歌え

池澤夏樹

新潮社



バビロン^ゆに行きて歌え^{うた}
池澤^{いけざわ}夏樹^{なつき}

発行——1990年1月20日

2刷——1990年3月10日

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

〒162/東京都新宿区矢来町71/振替 東京4-808

電話——業務部 03・266・5111

編集部 03・266・5411

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——大口製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

©Natsuki Ikezawa 1990, Printed in Japan

ISBN4-10-375301-3 C0093

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

バビロンに行きて歌え*目次

夜の犬

9

老獣医

27

ブルー・プレート

46

恋の日々

65

夢の中の戦場

91

パピリオ・メモノン

107

静かな、誰もいない島

131

ローリング族の居留地

150

倉庫のコンサート

170

天井の穴から見える星

189

取引

209

都会の力

230

装画 遠山登茂子

バビロンに行きて歌え

われらバビロンの河のほとりにすわりシオンをおもひい
でて涙をながしぬ われらそのあたりの柳にわが琴をか
けたり そはわれらを虜にせしものわれらに歌をもとめ
たり 我儕をくるしむる者われらにおのれを歎ばせんと
てシオンのうた一つうたへといへり われら外邦にあり
ていかでエホバの歌をうたはんや

夜の犬

午後遅く、床がほとんど揺れなくなつたのに彼は気づいた。船が湾に入ったのだ。速度を落としたのか、床から身体に伝わるエンジンの振動もずっと低くなつた。騒音のない空虚な感じは彼をとまどわせた。

しばらくたつてから、ここを出られるのだという期待感がじわつと湧いてきた。二十二日間の航海は長かつた。はじめの数日は戦闘の場を離れたという気のゆるみから、彼は固い鉄の床に長々と伸びてひたすら眠っていた。やがて船は紅海を抜けてインド洋に入り、昼間は気の狂うような暑さになつた。彼はぐったりとなつて、やはりうつらうつらしていた。船全体が暑さに息をひそめて夜を待っているようだったが、夜もまた暑かつた。彼は船にうんざりしはじめた。塗料庫の中に立ち込めた亜麻仁油とシンナーの匂い、隅に置いたバケツの尿の匂い、幽閉の匂いを、彼の生理は嫌悪した。港へ着けば外へ出られると、それだけを考へて待つた。しかし船はこの港にも寄らなかつた。二十二日、ひたすら走りつづけた。

船はゆっくりと埠頭に向かつてゐる。これからどうなるか、ここで降りてさしあたりどうすれ

ばいいのか、誰の世話になることになるのか、彼は何も知らない。彼は先のことを考えないようにした。今はまず広いところへ出て、手足を延ばし、新鮮な空気に肌をさらすことだけを思う。

ユースフが来て扉を開いた時、その向うに見える空はもう暗くなりかけていた。海が見え、長く延びた防波堤がちらりと見え、その彼方に夕闇に溶けこんだ都会のシルエットがあった。

「もうすぐ接岸だ。降りる準備をしろ」

「準備なんて何もないよ」

「そうか、荷物なしか」

「それで、パスポートは？」

「自分で取りに行け」

彼は不審げな顔で相手を見た。

「話が違う。船まで届けてくれるという話だっただろ」

「おれはそうは聞いていない。ここで降りたら、**大使館のイスマイルという男のところに行くんだ。そいつのところにパスポートはあるはずだ」

「知らない町でどうやってその大使館とかを探せばいいんだ？ 誰か手を貸してくれる者はいないのか？」

「ここは近東じゃない。組織の力も及ばないところだ。自分でなんとかするんだな」

ユースフは彼に対する悪意でそう言っているのではない。そういうことをする男ではない。彼は本当のことを言っているだけだ。航海のはじめに伝えれば彼が怒るようなことだから、航海の終わりに伝えた。それだけだということがわかった。それでも、次第に腹が立ってくる。

「おれはこの国の言葉を一つも知らないんだ。自分だけでパスポートを取りにいけるはずがないだろ」

「それはおまえの問題だ。おれが受けた指令は、ここでおまえを降ろせということだけだ」

「おれは降りない」

「大きな声を出すな。ここまで運んでやったんだから、ここで降りろ。少なくとも三か月はここで身を隠していて、それから、みんながあの一件を忘れたころ、戻ってこい。パスポートは別人の名義になっているはずだ」

「そんな馬鹿な話があるか。ここでパスポートを受け取って、すぐに飛行機に乗るって聞いてきたんだ」

彼はユースフに詰め寄った。相手はまったく動じなかった。腹立ちよりも不安、それ以上に恐怖感の方が強くなった。

「組織としてはおまえをあつちに引き渡すのが一番簡単だったんだ。それをここまで運んでやって、他人名義のパスポートまで用意した。あとは自力でなんとかするんだね」

「こんなところに三月も隠れていられない」

「どうしても降りないと、公海に出たところでおまえを海に放り込む。それはしたくない」

ユースフは淡々とそう言った。

「わかった。降りる」

不安は不安のまま残っていたが、その一方で動き出せばなんとかなるような気もした。坐って考えているよりは動く方が性に合っている。

「夜中に行け。明朝から荷役がはじまる。人の目も増える。あとで食べ物を届ける」
彼は黙ってうなずいた。

出て行きかけたユースフが振り返った。

「おまえが騒ぐから忘れるところだった。これがそのイスマイルの顔だ」

そう言つて、小さな汚れた写真を一枚手渡した。若い平凡なアラブ男の顔が写っていた。ひどくぼやけて、誰の顔と言つても通用しそうだった。それからユースフは、路上での相手との接触のしかたを詳しく教えた。

ユースフが出てゆく時、その背中越しにまた遠景の都会が見えた。

重い音と共に閉まつた塗料庫のドアを見ながら、彼は考えた。このトーキョーというところは初めてだったが、山や沙漠ではなく都会なのだから、なんとかなるかもしれない。九つの時から十年間、兄たちの後を追つて弾薬を運び、路地から路地を走りまわつて戦つてきたのだ。都会でなら、その大使館の男を見つけるまでの二、三日の間くらいはやっていけるだろう。パスポートが手に入れば、三か月は何か仕事をしていられるかもしれない。今は何も考えないことにしよう。

夜半、今度はアブデラがチキンの腿を一本とパンを四枚持つてきた。

「これが船でおまえにやれる最後の食べ物だ。もつと持つてこられるとよかつたんだが。今夜のうちに出る。食べたらずぐに行けとユースフが言つていた」

「わかつた。金はないか？」

「ない。おれは貧乏だ」

「ちがう。組織からの金だよ」

「そんな話は聞いていない。ユースフも何も言っていないかった」

あれば渡していただろう。そういう意味ではユースフもアブデラも信用できる男だ。

「氣をつけて行けよ。おまえはまだ若い。異国で、知恵をつけて、長く生きろ。じゃ、達者だな」

それだけ言うと、アブデラは彼を両腕でぎゅっと抱いて、行ってしまった。扉を閉める時に「インシヤラー」とつぶやいたのを聞いたような気がしたが、空耳だったかもしれない。

彼はしばらくぼんやりしていた。やがて氣をとりなおしてチキンだけをゆっくり丁寧に食べ、残った骨はバンにはさんでシャツの中にした。バスポートを受け取りに行こう。むずかしいだろうが、自分一人でやってみるほかない。

用心しながら通路に出て、接岸している右舷側にそとまわってみた。甲板には誰もいない。岸壁にも人影はなかった。埠頭のどこかに自動小銃をもった衛兵の姿があるだろうと探したが、それらしい者は見えない。まばらな街灯に照らされた埠頭には、大きな倉庫がいくつも並んでいる。見えるかぎり動くものは何もなかった。遠くにたぐさんの水銀灯が曲線を描いて並んでいるのを、彼は黒い空に並んだ星のように美しいと思つて見た。

まだ船から岸へのラダーは降ろしてなかった。舷門当直もいない。彼は心を決めて船尾の方へまわり、中甲板に降りて手摺を越えた。太いもやい綱に猿のようにしがみついて、ゆっくりと用心深く岸へ渡った。もやい綱には鼠よけの輪がついていて、それを越えるのに苦労した。

五分後、彼は岸壁のざらつとしたコンクリートの縁に手を掛けて身体を引き上げた。ひさしぶ

りに揺れない地面を踏んだ。夜の空気は気持ちがいい。身を低くして倉庫の陰から陰を伝いながら、船から離れた。街灯はともっていたが、静かで、誰もいなかった。

倉庫の横から裏へぬけると、ずっと先に高い金網の柵があつて、その向うが道路だった。見たところはただの金網だけで、上端に電流が流してあるでもなく、有刺鉄線さえ張っていないようだ。彼は物陰から周囲をしばらく見ていて人の気配がないことを確認してから、金網をよじのぼって越え、音をたてないよう反対側に跳びおりた。

広い道路の端に大きなシップ・コンテナを牽いたトレーラー・トラックがずらりと並んで停まっていた。トラックの陰に坐つて夜明けを待つことにした。船のものを盗ったわけではなし、下船さえしてしまえば遠くへ行く必要はないだろう。

眠くはなかつたので、ぼんやりと道路を見ていた。しばらくして、車が一台通つた。乗用車で、男と女が乗つて、男が運転していた。ゆっくりとあてのない走りかただ。彼は逃げてきた町の国連軍のパトロールを思い出した。しかしこの車の中の二人は眠たげで、周囲を警戒するどころか前さえ見ていないようだった。行くあてのない白い車がぐずぐずと走り去るのを彼は物陰から見送つた。

結局は少し眠ってしまったらしい。気がつくと、日が昇り、あたりが明るくなっていた。そこが広い平坦な土地で、整備された道路が走り、倉庫が延々と続いた大きな港の一角であることがわかつた。路面はきれいに舗装されているが、歩道の方は四角い敷石の隙間からひよろひよろと草が延びていた。歩く者が少ないのだ。